

第五章
源平盛衰時代

一 平家の滅亡

「吾妻鏡」元暦二年三月二十四日（一一八五この年八月文治と改元）の条に

二十四日丁未長門国赤間関壇浦海上に於て源平相逢ひ、各々三丁を隔てて舟船を漕ぎ向ふ、平家五百余艘を三手に分け山賊兵藤次秀遠、並びに松浦党を以て將軍となし、源氏の將師と挑戦す。午尅に及んで平氏遂に敗傾す。二品禪尼宝剣を持し、按察局（あぜちのつぼね）先帝（安徳天皇春秋八才）を抱き奉り共に以て海底に没す。建礼門院水に入りたもうの処、渡辺党源五馬允熊手を以て之を取り奉る。按察局同じく存命す。但し先帝は遂に浮ばしめたまわず、若宮は御存命と云々

正史にはこのように伝えられているが、一方には安徳天皇非入水説がやかましく論議せられ、従つて御潜行地が各地にあり、特に御陵墓参考地、同伝説地としてあげられるものが県内外に十数ヶ所をあげることができる。今その著名なものを挙げると、

対馬久根田舎村大内山陵、薩摩国河辺郡硫黄島、播磨国宍粟郡マガリ村、因幡国法美郡国益村、摂津国能勢郡出野村岩崎山、肥後国球摩郡球摩、阿波国三好郡山城谷、阿波国美馬郡祖谷、豊前国隠襲ひそかの里安徳庵、長門国豊浦郡地吉村丸尾山、長門国下関阿弥陀寺、肥後国五家荘、肥前国川上山、日向国新院塚。

等であるが、県内では、

香美郡鉢ヶ森大山祇神社、高岡郡越知町横倉山、土佐郡本川郷稲村山行在所、吾川郡池川町椿山行在所、吾川郡奥名野川、高岡郡別府郡行在所、長岡郡大豊町王亡趾山（天星山）等御陵参考地をはじめ行在所、潜行地が伝えられている。勿論正史の上では確認されていないが、帝を抱いて入水した按察局及び皇母建礼門院が救助されている。幼帝

のみ行方が知れないというところに平家伝説の重みがあるのであろう。

(一) 平家一門阿波、土佐に潜行

さて元暦の年三月(一一八五)屋島の浦の戦に破れた平家は、再挙を期して西海に漂うたが、時に九州豊後では範頼が大兵を擁してその退路を待ちうけた。平家はのがるるに途なく遂に天皇を奉じて四国に上陸した。その時阿波国三好郡山城(谷栗山城)主田口良成(阿波良部重能とも云う)は、知盛始め平家の諸将と謀議し、成良は源氏に降伏した風をよそおい、天皇はじめ平家一門悉く入水せし如く見せかけ、同月二十八日成良自ら天皇に供奉して己が居城たる山城谷に導き奉り二ヶ月の間御潜在の後、阿波の祖谷山に潜幸、やがて香美郡垂生山に遷り(垂生御在所山)さらに松尾越えをして河又、八畝を過ぎ吉野川を溯り、土佐郡森村宮古野、大川村平家平、本川村日の浦同村休場、戸中稲叢(村山、大森礫ヶ滝、越裏門、奥南川殿小舎、吾川郡池川町椿山に至り、滝本軸之進の奉仕によって行在所が設けられ、ここに御潜在の後或る事件をきっかけに、同郡奥名野川に移り、さらに別枝都に一ヶ年余行在せられ文治三年(一一八七)八月平知盛、平経盛、平業盛、平資盛、乳母虎岡姫、門脇中納言教盛、田口成良、小松新三位中将助盛、小松少将有盛、左馬守行守、高倉園之助康清他七十七名を随えられ高岡郡越知町横倉山の行宮に遷行せられ、正治二年庚申八月八日御年二十三歳を以って崩去され横倉山上鞠ヶ岡に葬ったと伝えられる。

横倉山御陵墓について、宮内省等の達し書によると次のようなものがある。

一、明治十六年四月五日宮内省

其県下土佐国高岡郡越知村横倉山鞠ノ奈路古墳地ノ儀ハ御陵墓ノ見込有之二付当省所轄に附シ候各自今保存方適宜取計可申此旨相達候事但シ地域等之見込相立坪数字番号一廉限り取調実測図面相添可伺出且民有地之分ハ買上之積リヲ以ツテ代価取

調申出事

一、明治十八年四月四日内務省

其県管下土佐国高岡郡越知村横倉山鞠ノ奈路官有地第一種反別五町二反二十四歩立木共宮内省所轄ニ附スル儀許可相成候旨其筋ヨリ達相成候条地種反別等成規之通可取此旨相達候事

一、明治十八年九月十八日宮内省

其県下土佐国高岡郡越知村有之御陵墓見込地ノ儀十六年四月五日付番外ヲ以ツテ相達候趣モ有之候処右へ御陵伝説ト相唱可申此旨相達候事

一、明治十九年四月二十四日諸陵頭ヨリ通牒

十九年度御陵墓ニ属スル経費予算別紙仕訳書之通相定候条御承知迄ニ御通牒及候也

十九年度経費予算仕訳書

金参円也履給御陵墓伝説地掃除人夫賃

金六円也御陵墓諸費修繕費

一、明治十九年五月十二日宮内省庶務課通知

其村横倉山字鞠ノ奈路御陵墓伝説地ノ儀へ宮内省所轄ニ属セラレ保存相成候ニ付テハ諸般不都合無之様取締方可致此旨相達候事

但シ境内ニ異状有之節ハ其都度届出ベシ

横倉山御陵墓伝説地掃除之儀別紙積算之通り以ツテ其村織田真吉方へ為引受候条本人へ御示達之上諸事御監督有之度依命此段申進候也但シ柵内鍵壹個御送附候御到着ノ上ハ御一報有之度且掃除料ノ儀ハ追而會計課ヨリ送附ノ筈ニ候条此段申添候也

このように横倉山は、明治十六年より諸調査が進められ、明治十八年九月十八日宮内省より御陵墓伝説地に指定されその後昭和三年陵墓参考地に昇格された。

安徳帝に供奉した平家の一門およびその家の子郎党は、阿波山城谷栗山城に来った時は三百余名であったと云う



渡辺城址



三津子野城址

が、横倉山におちついた時は八十余名であったという。その間平家一門のうち平教盛、その一族は蕪生五在所山に没し、その三男能登守教経は安芸郡魚梁瀬に入り門脇氏の祖となり、二男越後守国盛は祖谷山にとどまり阿佐荘に居り阿佐氏の祖となる。国経の後六代貞吉に至り蕪生久保荘に移って久保姓を名乗る。

大豊は東は祖谷山に接し、南は蕪生郷に連なり、また、蕪生御在所山行在所より土佐郡本川村に移られた際の通路は当然松尾峠を越え河又、八畝を通られたであろうと推察できる。従って平家は何時の日かの再挙を期して、潜行途中の要所に家の子郎党を止めてその勢力の拡大を図ったであろうと思われる。それは前述のように山城谷に落ちてき

た時は三百余名であったものが横倉山におちついた時は八十余名であったことが、このことを物語るものである。すなわち今豊永に三谷・阿佐・西村・渡辺の姓が多いこれらは皆平家落人の子孫という。三谷氏の先祖は桓武平氏の一族代々京の三谷に住し姓を三谷と改む、その一族三谷重盛なるもの家従と共に文治三年夏豊永郷岩屋谷に落ち来り後西峰土居に移り住むに始まると（長宗我部地検帳にある筏木名に給地のある三谷二郎三郎

はその後であろう)また、小松内大臣重盛の裔小松采女之助なるもの、西峰に逃れきて三谷に住して姓を三谷と改むと、また、丸野九郎兵衛なるもの三谷丸野に住し三谷の姓を名乗り丸野系三谷の始祖となる。国盛(後教経)の子孫という阿佐氏は祖谷山に繁栄しその一派西峰に分住し阿佐氏の祖となる。また、西村掃部というもの文治の頃八畝河又に落ち来り地藏堂を建立して永住の地とし代々掃部を名乗りその子孫怒田、西峰方面に分住すと。また、平氏の残党渡辺高右衛門は中内の上の渡辺の城に來つて数年立こもり、敵の寄せくる事もないのでその一族次第に中内・川井・三子野・西峰方面に分住したという。

平家一門およびその残党が落ちてきて我が大豊の地に定着したことを証するものに、

応永二年(一三九五)八月書写豊樂寺奉納大盤若経奥書に

西峰住人平盛政

とある。

二 落人と文化の発達

神龜元年(七二四)僧行基によって、寺内に豊樂寺、粟生に定福寺と二大寺院の開創によって、僧侶による文化がもたらされたことを第一段とすれば、西村自登氏の説による、孝謙天皇の天平勝宝四年(七五二)八月に京師の巫覡十七人を土佐・伊豆・隠岐の三国に配流した。その内五人が土佐の河又に配流され、従者七人を伴っていたようであるという。当時の巫覡は可なり高い知識を持っていたので彼女等が大豊の開発に大きな指導力を発揮したと論じている。これが事実とすればこの巫覡等の来郷をもって第二段とすべきであろう。さらに第三段として、平家の

落人等による文化の発展をあげねばなるまい。

平家滅亡の後、源頼朝は鎌倉に幕府を開き、諸国に守護地頭職をおいて、武家政治の諸制度をすすめたが、平家の残党追捕もきびしいものがあつた。

やがて彼等が奉じ再挙を夢見た安徳天皇も越知村横倉山鞠ヶ奈路の行在所で正治二年（一二〇〇）庚申八月八日御年二十三歳を以つて崩せられたので、この事も落人達に伝わつたであらう。彼等は世の無情を感じつつもはや父祖の武名を語らず、弓取る手に鋤鎌を持つて着々と大自然の開拓をつづけ、王朝文化の扶植にとめたであらう。大豊の文化は国府を経て伝わつた文化でなく、京都直輸入の文化であるといえよう。村の方言や風習に王朝時代の遺風を今に止めており、一条氏によつて栄えた中村文化と相通ずるものがある。

三 大豊にのこる落人の伝説

美来天皇 南大王の上に福島神社がある。平家壇浦に敗戦後能登守教経、安徳天皇に従いて此の地に来る時、帝の衣裳目もまばゆいばかり美しかったので里人等帝のことを美来天皇と申し奉つたと、祭神は即ち天皇なりという。

（一説に「ペンテイ様」と称し天皇の御母なりとも云う）大王の地名もこれによつて起る。南大王とは中村大王に対して云うと。天皇は此地で崩じたとも云う。

銚天神 怒田部落の氏神を銚天神社という。

銚天王、天皇と関係なきやという。

高山神社 高山神社は、柚木岩倉山にある。

口碑によると、

屋島の戦に破れた平家の落武者、阿州祖谷山より葦生を経て笹ヶ峰を越え、蔭の打置きに城に來た時、里人等山賊の一隊が現れたと思い、恐れ戦き、このままでは彼の賊等は思うままの略奪をするかも知れんとて、手を拱きて傍観するより、かくまえるものは隠すが良いと各自家倉にありし穀物、財宝を老若男女の別なく担ぎ上げて、神社境内にある岩屋の中にかくまったという。今にこの岩屋を岩倉とよび、明治の初年までは神社名も岩倉神社と称した。

三子野城 三子野に城山がある。平氏の殘党数百人籠城した所と云う。

大ボシ山 大ボシ山は怒田の南方香美郡香北町の境にある高山で、安徳天皇此処に行在し給いて遂に此の山で崩じ給うという。山の名を王亡趾山（又は死の字をも當つと）とも云う。

このように大ボシ山をめぐる。八畝河又・南大王・怒田・三子野・柚木等に安徳天皇及び平氏の殘党にまつわる伝説がかずかずある。何の資料もない盲説とはいえ、祖谷山の阿佐氏・安芸郡の門脇氏・葦生の小松氏・大豊の三谷・阿佐・小松・西村・渡辺等の諸氏を併せ考える時、みだりに棄つべきでなく後世に伝えるべきものであらう。

さらに平家の信仰が厚かった熊野権現を祭る神社が多い、粟生の熊野神社・西峰の十二所神社・柚木・三子野・蔭の在宮三所神社・土居の有宮三所神社・澁長の石本三所神社・川井の三所若宮神社等前述の平家殘党及び伝説のある部落は殆んどである。殊に西峰の十二所神社は西峰の総氏神で、三谷家、阿佐家とは古來特殊な関係があるという。思うに彼等は新天地開拓にその信仰の厚かった熊野権現を勧請して鎮守としたものであらう。

（三所権現は熊野の本宮・新宮・那智の三熊野の合祀を意味しその末社を合祭すれば十二所権現で三所或は十二所と稱し何れも同一熊野権現である）

粟生の熊野神社については別説あり、定福寺守護神として勧請したもので、西峰方面の三所、十二所神社とは別であるという。（昭和九年発行藤原豊安著安徳天皇御史蹟及び松高明輝著東豊永小史、高知県史古代中世編による）

四 源氏と大豊

源平の争乱は文治元年（寿永四年一一八五）の壇ノ浦海戦によって源氏の大勝となり、さしも一門の公卿十六人、殿上人三十余人、諸国の受領、衛府、諸司六十余人、平大納言時忠をして、「此一門にあらざらむ人は皆人非人なるべし」と言わしめた平家一門の榮華もついに終りを告げ、世は源氏の時代となる。この時代土佐には、源義朝の五男希義が介良庄へ流されて二十年の後伊豆の蛭ヶ小島に流されていた兄頼朝が以仁王の令旨を奉じて兵をあげることになる。介良庄にいた希義も当然兄の挙兵に呼応すべき人であるが、兵を動かすことなく年越山で敗死した。これについて「吾妻鏡」寿永元年九月二十五日の条につきのようである。

廿五日 癸巳

土佐冠者希義は、武衛（頼朝）の弟なり。母は秀範の女去永曆元年、故左典厩の縁座に依って当国介良庄に配流の

処、

近年武衛、東国に於て義兵を挙げ給ふの間合力の疑有りと称して、希義誅す可きの由、平家下知を加ふ。仍って故小松

（重盛）

内府の家人蓮池権守家綱、平田太郎俊遠各々当国功を願さんが為、希義を襲はんと擬す。希義日頃夜須七郎行家土州の住人と約諾

の旨あるに依って、介良城を辞し、夜須庄に向ふ。時に家綱、俊遠等、吾川郡年越山に追ひ到って、希義を誅し訖んぬ。行家は、又家綱等、希義を囲むの由之を聞及び、相扶けんが為に、件の一族等馳向ふの処、野の宮の辺に於て、希義誅せらるるの由を聞き空しく以て帰り去る。而して家綱、「俊遠」等、又行家を討たんとするの間、船を粧ひ、一族之に相乗りて、仏崎より海上に浮び逃亡す。家綱等其の船津に馳せ到り、先づ行家を度らんが為、二人の使者を行家の船に遣わして、談合すべき事あり、来臨す可きの由を称す。行家家綱等の造意を察せしめ、二人の使者の首を斬り、船に棹して紀井の國に赴くと。

云云

源氏と大豊との関係については、資料、伝承共にないので、在地豪族がどのような動きをしたかわからない。

平家滅亡によって、世は源氏の天下となり頼朝は鎌倉に幕府を開き、諸国に守護、地頭を置き、関東有力御家人をもって補任し、その職務を行なわせた。守護人の職務は謀叛人、殺人者の逮捕、大番催促等の任務であった。

さて最初の土佐守護は、梶原朝景で文治二年土佐へ派遣され、頼朝の敕命によって、土佐国内の「沙汰鎮」をしたと「吾妻鏡」にある。ついで、佐々木経高が阿波・土佐・淡路三国の守護となったが、承久の乱に後鳥羽上皇の召に応じて、院の御所に参じた。戦は上皇方が破れ佐々木経高は京都の合戦で自殺した。乱後の守護として戦功のあった、信濃の小笠原長清が補任せられその子長経は信濃へ帰り、弟長房が守護職をついだ。小笠原氏は清和源氏庶流で武田とならぶ名族である。大豊の源氏とのつながりはこの時代にはじまり、吉野朝時代に官方として活動することになる。